

古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(2)

安 藤 充

キーワード：古ジャワ語、Sārasamuccaya、金言、マハーバーラタ

前編¹⁾に続き、Sārasamuccaya 第31偈から第70偈のテキスト（サンスクリット偈と古ジャワ語解説）のローマ字転写、それぞれの和訳を示し、テキストの典拠や異読、その翻訳に関わる知見や問題点などを注記していく。

31.

arjajey jñānam arthās ca vidvān amaravat sthitaḥ /

keśeṣv iva grhītaḥ san mṛtyunā dharmam ācaret //²⁾

賢者は不死となったごとく泰然として知識と財とを獲得すべきである。（一方）死神に髪のを掴まれたがごとく、本務を行うべきである。

matañya deya nika sañ meñēt / apagēh kadi tan knēn pati / lwira nira n pañarjan jñāna / artha /
kunañ yan pañarjana dharma / kadi katona rumēngut³⁾ mastaka nira / ta pwa ikañ mṛtyu de nira /
ahosanāpalaywana⁴⁾ juga sira //

よくよく心にかけて次のようにすべきである。死なない身となったかのごとくしっかりと知識を、そして財を追求すべきである。しかるに、本務も追求すべきであるが、それは、死神に頭を掴まれてもう逃げられないかのごとくに行わなければならない。

32.

mastakasthāyinaṃ mṛtyuṃ yadi paśyed ayaṃ janaḥ /

āhāro 'pi na rucyeta kim utākṛtyakāritā //⁵⁾

もしその人が額にいる死神を見たならば、食べものも味気なくなる。ましてや悪行をなそうなどという気もなくなる。

yan wruha kētikañ wwañ an nirantarāñite manuñgañ ri mastakanya ikañ mṛtyu / yaya tan hyunanya mañana tuwi / ñūniñūni kagawayan in adharna //

もし、死神が絶えず額に居座っていることをその人が知れば、食事すら欲しくなくなる。ましてや、本務に背くことを行おうなどとは思わない。

33.

yuvaiva dharmam anvicched yuvā vittam yuvā śrutam /
tiryag bhavati vai darbha utpatan na ca vidhayati //

若人こそ本務を追求すべきである。若人は財を、知識を追求すべきである。ダルバ草は年を経て垂れ下がり、何かを突き刺すことはない⁶⁾。

matañnya deya niñ wwañ / pēñpēñan ikañ kayauvanan / pañḍēñ niñ awak / sādhanākēna ri kārjanan in dharna / artha / jñāna / kunañ apan tan paḍa kaśaktin in atuha lawan rarai / dṛṣṭānta nahan yañ alalañ atuha / tēlas rumēpa / mari n alaṇḍēp ika //

それゆえ、人はこのように行動すべきである。若さという好機を逃してはならない。自らをよく見据えて、本務と財と知識の追求に仕える者となるべきである。というのも、老人と若者の能力は等しくないからである。しなびたアララン草の例をみるがよい。垂れ下ってしまっただけからでは、突き刺す鋭さもなくなっている。

34.

pūrve vayasi yaḥ śāntaḥ sa śānta iti me matiḥ /
dhātuṣu kṣīyamāñeṣu śamaḥ kasya na vidyate //⁷⁾

若いときに冷静な人こそ、冷静な人と私は思う。
体液が老化してくれば、誰か落ち着きのない人などいるだろうか。

lawan ta waneḥ / ikañ upaśaman / rarai ktikañ sinañgah upaśama / apan jāti ñ upaśama / yan katkān tuha / ri kṣaya niñ dhātu ñke ri śarīra / nā ñ wāta / pitta / śleṣma //

また他の人々はこう言う。冷静さというのは若い人がそうであれば、冷静だと言われるのである。なぜなら本性として冷静であるから。年老いれば、風・胆汁・粘液といった体液⁸⁾が老化して（冷静になるのは当然である）。

35.

yuvatāpekṣā bālo vṛddhatvāpekṣā yuvā /
mṛtyor utsaṅgam āruhya sthaviraḥ kimu apekṣate //

子供は青春に憧れ、若者は成熟に憧れる。

死神の膝に乗って、老人は何を目標とするのか。

nihan parikrama niñ dadi / kayauwanan / aṅgēh inanti niñ kararayan / ikañ kayauwanan / si tuha /
aṅgēh inanti nika / katēmu pwa si tuha / hanēn kisapwan in mṛtyu ta naran ika / aparan tikañ
aṅgēh inantinya / ṅhin si pāti juga / matañnyan usōnakēna kagawayan in dharmaprawṛtti //

真実は次のような次第である。幼子は青年期を待望する。青年は老成を待望する。老年期に至れば、「死神の膝にいる」と言われる。そのような人はいったい何を待望するのか。ただ死に至るばかりである。だからこそ、いそいで本務の実践に取り掛からねばならない。

36.

purā śarīram antako bhinatti rogasārathih /
prasaḥya jīvitakṣaye śubhaṃ mahat samāharet //⁹⁾

最初に、病気を御者とする死神が身体を壊す。

命が減しようとするとき、ひとは努めて気高い善行を仕上げるべきである。

apan sañ hyañ mṛtyu naran ira / sarwa wyādhi pinakasārathī nira / nimitta niñ huripkṣaya / kṣaya
pwa ṅ hurip / tēka tañ pāti / matañnya haywa pramāda / usōnakēna juga ṅ śubhakarma¹⁰⁾ /
tumuntunakēna kita riñ paran //

なぜなら、死神と呼ばれる方は、あらゆる病いを御者としてやってくる。それが身体が減びる原因である。身体が減びれば死に至る。したがって、ぼんやりしてはいられない。すみやかに善行をすべきである。死への旅路に向かっているからには。

37.

yuvaiva dharmasīlaḥ syād anityaṃ khalu jīvitam /
ko hi jānāti kasyādyā mṛtyusenā patiṣyati //¹¹⁾

若者こそ本務を常とすべきである。人生は実に常ならないゆえに。

きょう誰のもとに死神の軍勢が向けられるか、誰が知っていようか。

matañnya pēñpōnan wēnañ ta / mañke n rarai ta pwa kita n lēkasakēna agawe dharmasādhana /
apan anitya ikiñ hurip / syapa kāri wruha ri tēka niñ pāti / syapa mañwruhana ri tēka niñ pātinya
wih //

それゆえ、可能な時機を逃さず、若いときこそ、本務の完遂に邁進すべきである。なぜなら、人生は無常であるから。いったい誰が死の到来を知り得ようか。誰が死の到来を(その人に)知らせられようか。

38.

ā dhumāgrān nivartante jñātayaḥ saha bāndhavaiḥ /
yena taiḥ saha gantavyaṃ tat karma sukṛtaṃ kuru //¹²⁾

知人も親族も火葬の煙の先までで引き返す。
(その先も) 同行してくれる善行をこそ (この世で) 行え。

apan ikañ kadañwarga rakwa / riñ tunwan hiñan ika n pañatērakēñ / kunañ ikañ tumūt / sahāya
nikañ dadi hyañ riñ paran / gawenya śubhāśubha juga / matañnya n prihēna tikiñ gawe hayu /
sahāyantānuntunakēna ri pōna dēlāha //

なぜなら親族らは火葬場までしか付き添えない。あの世への旅路にも付き添ってくれる
ありがたい存在こそ友。(その友である) 善行中の善行をこそ行うべきである。した
がって善行にしっかり励むべし。その友は、あの世まで付き従ってくれるだろう。

39.

mṛtaṃ śarīram utsrjya kāṣṭhaloṣṭasamaṃ janāḥ /
muhūrtam uparudyātha tato yānti parañmkhāḥ //¹³⁾

ひとは亡骸を棒きれや土塊のごとく見捨てる。しばし嘆き悲しむも、やがて顔を背ける
ものだ。

lawan tattwa nikañ kadañ nāranya / ri pātinta / kāri tikañ śarīra tan pamūlya / makānta¹⁴⁾
timpalakēna / tan hana pahinya lawan watañ¹⁵⁾ wiñka / ya ta sinuñkēman iñ kadañta / irikañ
sādhana / i wēkasan luñghā tikāmalañ¹⁶⁾ / matañnyan prihēn tikañ dharmasādhana / sahāyanta
tumēkākēna kita riñ bhukti muktipada //

また、親族の実態というのはこうである。そなたが亡くなったとき、その亡骸は価値な
きものと置き去りにされ、ついにはうち棄てられる。棒きれや陶片と何ら違いがない
(ように)。親族らは葬儀¹⁷⁾の間は (亡骸に) 自らの体を寄せるものの、ついにはそっぽ
を向いて立ち去るものだ。それゆえ、本務の遂行に専心すべきである。(それこそ) そ
なたの友として解脱の境地を得るところまでそなたに付き従ってくれるだろう。

40.

eko dharmāḥ paraṃ śreyayaḥ kṣamaikā śāntir ucyate /
vidyaikā paramā tuṣṭir ahimsāikā sukāvahā //¹⁸⁾

本務が唯一最高の善である。堪忍こそ寂静と言われる。
知識が唯一至高の悦楽である。不殺生こそ幸福をもたらす。

ñhiñ dharma kēta sāksāt hayu / sāksāt wibhawa ñaranya / ñhiñ lēbā¹⁹⁾ niñ manah / kēlan ta riñ
 panas tis / kēta prasiddha tamba / prāyaścitta / pamaḍēm lara ñaranya / ñhiñ samyagiñāna tuturta
 / ajinta / wruhta riñ tattwa / paramārthēnak ambēk ñaranya / ñhiñ ahiñsā / si tan pamāti-māti / si
 tan hana kakrodha / byakta niñ sukha ñaranya //

本務のみが真の善である。真の尊厳と言われるものである。心の広さ、(すなわち) 寒暑を耐え忍ぶことは、まさに癒やしとなり、罪を贖い、苦痛を抜去すると言われる。正しい知識、(すなわち) そなたが習得する学識、真理の知識こそ、究極の喜び²⁰⁾ となると言われる。不殺生、(すなわち) 殺さないことは怒りのないことであり、まさに幸福であると言われる。

41.

ekaṃ yađi bhavec chāstram śreyo nissamśayaṃ bhavet /
 bahutvād iha śāstrāñam guhām śreyaḥ praveśitam //²¹⁾

教典が一つであれば疑いなくそれが至徳であるとされる。

この世には教典が数多あるために、至徳が洞穴深くに閉じ込められている。

yan tuñgal kēta sañ hyañ āgama / tan sañsaya ñ wwañ irikañ sinañgah hayu /
 swargāpawargaphala / akweh mara sira / kapwa dudū pakṣa nira sowañ sowañ / hetu niñ wulañun
 / tan añgā²²⁾ riñ añgēhakēna / hana riñ guhā gahwara / sira sañ hyañ hayu.

聖典が一つだけであれば、人は疑いなくそれを、天界と解脱という果をもたらす善なるものとする。(聖典が) たくさんあり、その見解は一つ一つ異なる。それで混乱してしまい、洞穴の奥深くに聖なる善があるのに、それを確かめようという気がないのである。

42.

mā tāta vṛddhān paribhūḥ śikṣasvāgamayasva ca /
 aher iva hi dharmasya sūkṣmā duranugā gatiḥ //²³⁾

息子よ、年輩者を見下してはならない。彼らから学び知識を得なければならない。

本務のあり方は、蛇のごとく、微妙で近づきたいものだ。

matañnya bapa / haywa juga masampai riñ wwañ matuha / lot atañāminta winarah / riñ kadi sira
 ta pwa kita / apan ikañ dharma ñaranya / paḍa lawan ulā / ri kapwa tan kinaniścayan lari nira /
 dadyan saka lor / dadyan saka kidul marika ñ ulā //

それゆえ、息子よ²⁴⁾、老人を侮蔑してはならない。そなたの方が、彼らに対して、あたかも、なんとしてもお願いして教を乞うがごとき存在なのだ。というのも、本務と言われるものは、蛇と同じだからだ。どちらも²⁵⁾ 動く方向がよくわからない。北から来る

かもしれないし、あるいは南から来るかもしれない。まさに蛇だ。

43.

śrutir vedaḥ samākhyāto dharmasāstraṃ tu vai smṛtiḥ /

te sarvārtheṣv amīmāṃsye tābhyāṃ dharmo vinirbhṛtaḥ //²⁶⁾

天啓とはヴェーダ聖典、古伝とは法典のことである。この両者はいかなる点においても論議の対象としてはならない。本務はその両者によって満たされるものである²⁷⁾。

nya ṅ ujarakēna sakarēṅ / śruti nāranya saṅ hyaṅ caturveda / saṅ hyaṅ dharmasāstra smṛti nāran
ira / saṅ hyaṅ śruti / lawan saṅ hyaṅ smṛti / sira juga pramāṅkēna / tūtakēna wara-warah nira /
riṅ asiṅ prayojana / yāwat maṅkana paripūrṇa halēp saṅ hyaṅ dharmaprawṛtti //

さて今から語ることを聞きなさい。天啓というのは四つのヴェーダ聖典である。法典が古伝と言われる。天啓と古伝とを正しい知識を得るための手段としなければならない²⁸⁾。すべての目的のために²⁹⁾、その教えに従うべきである。そうすれば、本務にもとづく行為が美しく貫徹されるだろう。

44.

cāturvarṇyaṃ tathā lokāś catvāraś cāśramāḥ pṛthak /

bhūtaṃ bhavyaṃ bhaviṣyac ca sarvaṃ vedāt prasiddhyati //³⁰⁾

四身分も世界も四住期も、過去も現在も未来も、すべてはヴェーダから生まれる。

apan saṅ hyaṅ weda nāran ira / sira saṅkan iṅ caturvarṇa / sira tumiṅkah utpattinya / tēka ri
ācāranya / sowaṅ-sowaṅ / maṅkana ṅ rāt / maṅkana caturāśrama / caturāśrama nāran saṅ
brahmacārī / grhastha / wānaprastha / bhkṣuka / wastu huwus dadi / wastu sēḍēn hana / wastu
yāṅkēn dadya kunēn / ika ta kabeh / saṅ hyaṅ weda saṅkan ika //

なぜなら、ヴェーダ聖典といわれるものは、四身分の起源³¹⁾であり、その誕生から行動規範までそれぞれを（ヴェーダが）配置しているからである。世界についても同様である。四住期についてもそうである。四住期というのは、梵行期、家住期、林住期、遊行期である。過去に起こったこと、今起こっていること、これから起ころうとしていること、これらすべては、ヴェーダがその原因³²⁾である。

45.

itihāsapurāṅbhyāṃ vedaṃ samupavṛṇhayet /

bibhety alpaśrutād vedo mām ayaṃ pracariṣyati //³³⁾

伝説と古譚とによりヴェーダを全きものとしなければならない。

ヴェーダは浅学の者を恐れる。このようなものが私に近づいてくる³⁴⁾として。

ndān sañ hyañ weda / paripūrṇākēna sira / makasādhana sañ hyañ itihāsa / sañ hyañ purāṇa / apan
atakut / sañ hyañ weda riñ akēḍik ajinya / liñ nira / kamuñ hyañ / haywa tiki umarā ri kami / liñ
nira mañkana rakwa atakut //

さてウェーダ聖典は伝説と古潭により完全なものとされる。なぜなら、ウェーダ聖典は
聖典（の知識）が少ない者を恐れるからである。ウェーダがのたまうには、「おまえは
私に近づくでない」と。このように恐れているのである³⁵⁾。

46.

vedoktaḥ paramo dharmas tathā smṛtigato 'paraḥ /
śiṣṭācāraḥ paraḥ proktas trayo dharmāḥ sanātanāḥ //³⁶⁾

ヴェーダに説かれる法が最高である。古伝に含まれる法もまた比類ない。
賢者の振る舞いは最上であると説かれる。この三つの法は永遠である。

kunañ keñētakēna / sāsiñ kājara de sañ hyañ śruti / dharma naran ika / sakājar de sañ hyañ smṛti
kunēñ / dharma ta naran ika / śiṣṭācāra kunañ / ācāra nika sañ śiṣṭa / dharma ta naran ika / śiṣṭa
naran sañ satyawādī / sañ āpta sañ patīrthan / sañ panaḍahan upadeśa / sañkṣepa ika katiga /
dharma naran ira //

次のことをよく憶えておきなさい。天啓聖典³⁷⁾により説かれるすべてのことが法である
と言われる。古伝によって説かれるすべてのこともまた、法であると言われる。優れた
振る舞い、すなわち賢者の行為³⁸⁾も、法と呼ばれる。賢者とは、真実を語る方、知恵全
き方、お聖人、教えを授けくださる方である。要するに、これら三つが法であると言わ
れるのである。

47.

na tat parasya sandadyāt pratikūlaṃ yad ātmanaḥ /
eṣa sañkṣepato dharmāḥ kāmād anyat pravartate //³⁹⁾

自分にとって嫌なことを他人に対してすべきでない。
要するにこれが法である。その他のものは欲望から生起する。

kunañ deyanta / hana ya prawṛtti / kapuhara de niñ kaya / wāk / manah / ndātan panukhe ya ri
kita / magawe dukkhāpuhara⁴⁰⁾ ḥdroga / ya tika tan ulahakēnanta riñ len / haywa tan harimbabā
/ ika gatinta mañkana / ya tika sañkṣepa niñ dharma naranaya / wyartha kadamlan iñ dharma yan
mañkana / lilānta t gawayakēna ya //

次のように行動すべきである。身体と口と意識によって行為が引き起こされるのだが、そなた（自身）にとって不快であり、苦しみを生み、結果的に心痛となる（行為もある）。そのような行為を他人に対してしてはならない。他者に鈍感であってはならない⁴¹⁾。このようなあり方が法と呼ばれるものの肝要である。そのよう（に他者に鈍感）であれば、法の実践も無益である。自分に心地よいことをなすべきである⁴²⁾。

48.

ye tu śiṣṭāḥ suniyatāḥ satyārjavaparāyaṇāḥ /
dharmyaṃ panthānam ārūḍhās teṣāṃ vṛttaṃ samācara //⁴³⁾

賢明で、道理を弁え、誠実さと率直さを貫き、本務の道を進み行く人々、彼らの行為に従いなさい。

kunaṅ sarwadāya / ika saṅ śiṣṭa / saṅ āpta / satyawādī / jitendriya ta sira / satyālaris duga-duga /
niyatāpasaṅdan⁴⁴⁾ dharma solah nira / prawṛtti nira / ya tika tūtakēnanta / katūtan ika / ya tika
dharmaprawṛtti naranya //

総じて⁴⁵⁾言えば、賢者は完璧な知識をもち、真実を語り、感覚器官の抑制がきき、誠実で率直、ひたむきである。その態度や行動はしっかりと法に依拠している。それに従いなさい。それが模範である。それが法の実践と呼ばれるものである。

49.

sarvato bhrāmyamāṇasya dharmasya rathacakravat /
veśyāsutasyeva pitur niścayo nopalabhyate //

車輪のごとく四方八方で動き回っている法は、売春婦の息子の父親を確定できないように、その見極め⁴⁶⁾が困難である。

kunaṅ saṅ hyaṅ dharma / mahas midṅr in sahana / ndātan hana umaku sira / tan hanēnaku nira /
tan sāpa juga si lawan ikaṅ nahan-nahan / tātan pahi lawan anak niṅ strī laṅji / ikaṅ tan
kinawruhan bapanya / rūpa niṅ tan hana umaku yānak / tan hana inakunya bapa / ri wetnyan
durlabha ikaṅ wēnaṅ mulahakēna dharma kaliṅan ika //

さて法とは、あらゆるものの中で動き回り回転するが、それを我が物としたり、それによって我が物とされたりすることはない。似たようなものでもそれと共通するものはない。不貞な女の息子の父親がわからないのと同じである。自分の息子だという男もいないし、この人が父親だともいえないのと同様である⁴⁷⁾。このようであるから、どのような働きをすることができるかわからないのが法である。法についてこれが真意である。

50.

śrūyatām dharmasarvasvaṃ śrutvā caivopadhāryatām /

ātmanaḥ pratikūlāni na pareṣāṃ samācara //⁴⁸⁾

法の精髓についてよく聞きなさい。聞いたのちには法を堅持しなさい。自らの意に沿わないことを他人にしてはならない。

matañya t rēñō sarwadāya / paramārtha niñ sinaṅgah dharma / tēlēs rinēñōnta cupwanantā ta ri
hati / ikañ kadi liñ mami nūni wih / sāsiñ tan kahyun yāwakta / ya tika tan ulahakēnanta riñ len //

ゆえに、法とよばれるものの精髓、(すなわち)究極の意味をよく聞きなさい。それを聞いた後は、心に大切にしまっておきなさい⁴⁹⁾。前に私が語った⁵⁰⁾ように、自分の望まないことはどんなことでも他人にしてはならない。

51.

pulākā⁵¹⁾ iva dhānyeṣu puttikā iva pakṣiṣu /

tādṛśās te manuṣeṣu yeṣāṃ dharmo na kāraṇam //⁵²⁾

法を動機としない者は、人間の中では、糶の中の糶のごとく、鳥の中の白蟻のごとくである。

kunañ ikañ wwañ pisaninun damēlakēna ñ dharmasādhana / hapa-hapa niñ pari / wūkan in antiga
paḍa nika / rūpa niñ hana tan papakēna //

さて、本務を全うしようとするのではない人というのは、米の中の空糶、鳥の中の腐敗卵⁵³⁾のごとく、役立たずに見える。

52.

mriyante janmano ‘rthāya jāyante maraṇāya ca /

na dharmārthaṃ na kāmārthaṃ ṭṛnānīva pṛthagjanāḥ //

凡夫は草と同じく、生きるために死に、死ぬために生きる。法のためでも欲望のためでもない。

apan purih nikañ pṛthagjana / tan dharma / tan kāma / kasiddha denya / ñhiñ mātya donya n
ahurip / don in pātinya / ñhiñ janma muwah / ika tañ pṛthagjana mañkana kramanya / tan hana
pātinya idēp nika / taha piḥ⁵⁴⁾ / tan hana pahinya lawan dukut / riñ kapwa pāti don in janmanya /
janma don in pātinya //

というのも、ふつうの人々の性向では、法も快樂も達成されることはない。ただ死ぬこ

とが彼らの生きる目的であり、また、死の目的が生である。これがふつうの人々の生き方である。(つまり)死が(固定的に)存在しないという考え方である。あり得ない。(これでは)草と何ら異なることがない。生の目的がすべて死に向かい、死の目的が生となっている。

53.

ye tu dharmam asūyante buddhimohānvitā janāḥ /
apathā gacchatāṃ teṣāṃ anuyātāpi pīḍyate //⁵⁵⁾

知性が濁り、法に不平を言う人々は邪悪の道を進むが、彼らに従う者たちもまた、苦痛を味わう。

mwaṅ ikaṅ wwaṅ nindā riṅ dharmaprawṛtti / de niṅ puṅṅnya⁵⁶⁾ / jēṅek ta ya riṅ adharmaprawṛtti
/ ikaṅ manūt-nūt iriya tuwi / niyata pamaṅguhanya lara //

さらに、無知ゆえに法にもとづく行為をなじり、法に背く行為にひたる者、そうした彼らに連れ添う者は、確実に、苦痛を得ることになる。

54.

adharmarucayo mandās tiryagatiparāyaṅaḥ /
kṛcchrām yonim anurprāpya na vindanti sukhaṃ janāḥ //⁵⁷⁾

法に親しまず、畜生界を終の生まれとする愚者は、痛み多き胎に至り、安楽を得ることはない。

kunaṅ lwir nikaṅ mūḍha / jēṅek riṅ adharma / antasnya sakēṅ niraya / maṅjanma ta ya tiryakprāṅī
/ meṣamahīṣādi / bwat niṅ janmanya jēmah / maṅjanma ta ya riṅ nīca / kasakitan ta ya kinuṅcaṅ
iṅ lara prihatin / tan tēmu ṅ sukha //

さて愚か者の様相はといえば、法に悖ることに快をおぼえ、地獄は免れたとしても畜生界に生まれて羊や水牛などとなり、その生の酷さゆえ、行く末は、底辺の世界に再生する。病を患い、悲しみや痛みを襲われ、幸を得ることはない。

55.

dhanasya yasya rājato bhayaṃ na cāsti corataḥ /
mṛtaṃ ca yan na muṅcati samarjayasva tad dhanam //⁵⁸⁾

王からも盗賊からも脅かされない財宝、亡くなったときに残らない財宝、そういう財宝をひとは蓄積すべきである。

matañña nihan juga ñ ulah / hana ya mās tan kawēnañ rinampas / tan kawēnañ inahal / tumūt i pātinta / ikañ mās mañkana kramanya / yatika prihēn arjananta //

したがって、つぎのようにふるまうべきである。略奪もされず、盗まれもしない財宝、死ぬまで付き従う財宝、そのようなものこそ宝である。まさにそれを努めて獲得せよ。

56.

dharmas cen nāvasīdeta kapālenāpi jīvitaḥ /

āḍhyo 'smīty avagantavyaṃ dharmavittā hi sādhaḥ //⁵⁹⁾

乞食鉢で生きようとも、法を蔑ろにしていなければ、自分は裕福だと思ふべし。

よき行者は法を富とする。

yadyapin atyanta daridra kēta ñwañ / mahuripa ta de niñ tasyan / yan lañgēñ apagēñ riñ dharmaprawṛtti / hiḍēpēñ ta sugih jugāwakta / apan añhiñ dharmaprawṛtti / mās mañik sañ sadhu ñaran ira / yatika prihēn arjanan / yatika liñ mami mās mañik tan kēna riñ corabhayādi //

たとえ自分がひどく貧しくて乞食で生きようとも、法の実践が確かであれば、自分は豊かだと思ふなさい。なぜなら法の実践こそが善き人の金や宝石であると言われるからである。それをこそせつせと貯えなさい。この我が教えは、盗人にも奪われない宝玉である。

57.

dharmam ācarato vṛttir yadi nopagamiṣyati /

na nāma kiṃ⁶⁰⁾ śiloñchāmbuśākādy api vipatsyate //

法を実践していて生計が成り立たなくとも、それがどうしたというのだ。落ち穂や水や草が手に入るだろう。

lawan liñ mami / ika sañ kewala tumuñkulana ñ dharmaprawṛtti / tātan panēmwa upajīwana nira / apa matañña tar polih anasag / gañan / wwai / lwir niñ sulabha tēkwanani haraka nira //

さらに私は説く。もっぱら法の実践に傾注し、生きる糧が手に入らないとしても、野菜や水を拾い集めて⁶¹⁾得ない理由はない。手に入りやすそうな食べ物を掴み倒してでも得るのだ。

58.

santi śākāny arañyeṣu nadyas ca vimalodakāḥ /

candraḥ sāmānyadīpo 'yaṃ vibhavañ kiṃ prayojanam //⁶²⁾

森には食せる野菜、川はけがれなき水をたたえる。

月は皆々にとってのともしび。ここで富が何の役に立とうか。

nihan keñēta / akweh mara sāmsam riñ alas / mañkana ikañ lwah riñ alas / nirmalâdalēm aho
bañunya / kunañ suluhanta sañ hyañ niśākara / tātan padon kārjanan in wibhawa / sugyan
kālakṣepa //

次のことをよく心に留めておきなさい。森には食べられる植物はたくさんある。森にある川もそうだ。その水は濁りなく深く澄んでいる。また月はそなたの灯りとなる。富を
どんどん貯めても無意味だ。おそらく時間の無駄であろう。

59.

vyāpṛtenāpi hi svārthaḥ kriyate cāntare 'ntare /
medhṛī pṛṣṭhe 'pi hi bhrāmyan grāsaṃ grāsaṃ karoti gauḥ //

雇われ者であれ、合間合間に私財をこやす。雄牛も軛を背負って歩かされつつ、一口一
口草を喰む。

nihan tañ ulaha / ri duwēganyan haroharâhosana ñ wwan⁶³⁾ / i kaḡawayan in dharmasādhana /
sambina tikañ arthārjana riñ antara sañka pisan / kadī krama niñ lēmbu⁶⁴⁾ sēdēñ mesi hanuñan
walakañnya / midēr amatēk riñ sawah / sinambinya anjañgut dukut / sapaṛēk kaparah ri lakunya /
dadi ya tuṣṭa //

ひとの営みはこうである。法の実践をおこなうことに対してはとまどい苦勞する一方
で、財を貯め込むことは合間にちゃっかりとする。牛が背中に軛をつけて水田を掻き回
りながら、一步一步近づいては草を喰むのと同じだ。それで満足しているのだ。

60.

buddhena śāntadāntena nityam abhyutthitātmanā /
dharmasya gatir anveṣyā matyasya gatir apsv iva //⁶⁵⁾

賢者は、心を静かに調べ、常に次の動きに備えながら、法の道を追求すべきである。水
中における魚のありようのごとく。

lawan ta waneh / atyanta riñ ḡahana kēta sañ hyañ dharma ñaran ira / paramasūkṣma / tan pahi
lawan tapak niñ iwak riñ wwai / ndān pinet juga sira de sañ pañḡita / kēlan upaśamāpagwan⁶⁶⁾ /
kotsāhan //

またほかに（こう説かれる。）法と呼ばれるものは、極めて深遠である。微細の究極で
ある。水中の魚の軌跡と同じである。したがって、賢者はそれをこそ追求すべきであ
る。堪忍と静穩の心をもとに、努力して。

61.

brāhmaṇaḥ kṣatriyo vaiśyas trayo varṇā dvijātayah /
caturtha ekajāṭīyah śūdro nāstīha pañcamah //⁶⁷⁾

ブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャの三身分は、二度の誕生を有する者である。
第四のシュードラは誕生は一度であり、第五はない。

brāhmaṇādi niṅ varṇa / tumūt kṣatriya / tumūt vaiśya / ika saṅ varṇa tiga / kapwa dwijāti sira /
dwiājāti naran in piṅrwa mañjanma / apan ri sēḍēn nira n brahmacārī gurukulawāsī / kinēnan sira
dīkṣābratasāṅskāra / kapiṅrwa niṅ janma nira tika / ri huwus nira kṛtasāṅskāra / nahan mataṅnya
n kapwa dwijāti sira katiga / kunaṅ ikaṅ śūdra kapāt niṅ varṇa / ekajāti saṅ kadi rasika / tan dadi
kinēnan bratasāṅskāra / tātan brahmacārī / maṅkana kāṅḍa nikaṅ warṇān pāt / yēka caturwarṇa
naranya / tan hana kalima niṅ varṇa naranya //

身分の第一はブラーフマナである。クシャトリヤがそれに続き、その次がワイシャである。
この三身分はすべて再度生まれる。再度生まれるとは、二度誕生するということである。
なぜなら、彼らは現世で禁欲して学業に勤しみ、師の家に住み込み、入門と誓戒
の儀式を受ける。入門式を受けると、それが彼らの二度目の誕生である。このように、
それら三身分はみな再度生まれるのである。一方、シュードラは第四の身分で、誕生は
一度である。彼らは誓戒の儀式をうける由縁なく、禁欲の修学もない。このように身分
の区分は四種であり、四身分と言われる。第五の身分と呼ばれるものは存在しない⁶⁸⁾。

62.

adhīyāta brāhmaṇo vai yajeta dadyād iyāt tīrthamukhyāni caiva /
adhyāpayec yājayec cāpi yājyān pratigrahān vā vihītān upeyāt //⁶⁹⁾

ブラーフマナは学び、祀り、施し、聖地に赴くべし。

また、人をして学ばせ、祀るべきを祀らせ、定められた贈答を受領すべし。

nyā dharama saṅ brāhmaṇa / mañajya / mayajñā / mawecha dānapuṅya / magčlēm
atīrtha / amarahana / wikwani n ayajñā⁷⁰⁾ / maṅgapa dāna //

ブラーフマナの本務はこうである。学びなさい。供犠をしなさい。徳行という布施をし
なさい。聖地巡礼を続けなさい。ひとに教えなさい。供犠をおこなう行者を育てなさい。
布施を受けなさい。

63.

dharmaś ca satyaṃ ca tapo damaś ca vimatsaritvaṃ hrīś titikṣānasūyā /

yajñās ca dānaṃ ca dhṛtiḥ kṣamā ca mahāvratāni dvādaśa vai brāhmaṇasya //⁷¹⁾

高德、誠実、苦行、自制、嫉妬なき心、慚愧、忍辱、不平なきこと、
供犠、布施、堅忍、寛容。この十二がバラモンの大いなる誓戒である。

nyan brata sañ brāhmaṇa / rwawēlas kwehnya / pratyekanya / dharma / satya / tapa / dama /
vimatsaritwa / hrīh / titikṣā / anasūyā / yajña / dāna / dhṛti / kṣamā / nahan / pratyekanyan
rwawēlas / dharma / satya / pagwanya / tapa naranya śarīra-saṅśoṣaṇa / kapanasan in śarīra /
pihērana⁷²⁾ / kuraṇana viṣaya / dama naranya upaśama de niñ tuturnya / wimatsaritwa naran in
haywa īrṣyā / hrīh naran in irañ / wruha riñ irañ wiñ / titikṣā naran in haywa gōñ krodha / anasūyā
naran in haywa doṣagrāhī / yajña magēlēm amūjā / dāna / maweha dānapuṇya / dhṛti naran in
manēb⁷³⁾ ahniñ / kṣamā naran in kōlan / nahan brata sañ brāhmaṇa //

さてブラーフマナの誓戒だが、数は十二、それぞれを列挙すれば、高德、誠実、苦行、
自制、嫉妬なき心、慚愧、忍辱、不平なきこと、供犠、布施、堅忍、寛容である。この
ように列挙された十二のことである。高德と誠実は、(それらの)基礎である。苦行と
は、身体を干からびさせること、(すなわち)からだを熱で苦しめることである。感覚
器官の対象を制御し弱めることである。自制とは、意識の内部から自己を調御すること
である。嫉妬なき心とは、嫉妬心がないことである。慚愧とは、恥(の意識、すなわ
ち)、恥を知ることである。忍辱とは、怒りを大きくしないことである。不平なきこと
とは、難癖をつけないことである。供犠とは儀式を常に行うことである。布施とは、徳
行を贈り物として差し上げることである。堅忍とは、自らを律し汚れなきことである。
寛容とは耐えて受け入れる心である。これらがブラーフマナの誓戒である。

64.

adhītya vedān parisamṣṭīrya cāgnīn iṣṭvā yajñaiḥ pālaytvā prajāś ca /
bhṛtyān bhṛtvā jñāṭisambandhinaś ca dānaṃ dattvā kṣatriyaḥ svaram eti //⁷⁴⁾

ヴェーダを学び、祭火を灯し、供犠を行い、人民を守護し、
従者、親族知人を支え、物を貢いで、クシャトリヤは天界に赴く。

kunañ ulaha sañ kṣatriya / umajya sañ hyañ weda / nityāgnihotrā / magawaya ṅ yajna / rumakṣa ṅ
rāt / huniña riñ wadwa tēka riñ kulagotra / maweha dāna / yapwan mañkana / svargapadāntuka
nira dlāha //

クシャトリヤの行動はこうあるべきである。ウェーダを学びなさい。常に火神へのお供
えをしなさい。供犠を行いなさい。国を守りなさい。兵士ら、そして一族を大事にしな
さい。布施をしなさい。このようにすれば、(クシャトリヤは)将来、天界という行き
先を手に入れるだろう。

65.

vaiśyo 'dhītya brāhmaṇāt kṣatriyād vā dhanaiḥ kale saṃvibhajyāśrītāmś ca /
tretāpūrvaṃ dhūmam āghrāya puṇyaṃ pretya svarge devasukhāni bhukṣte //75)

ヴァイシャはブラーフマナあるいはクシャトリヤに学び、また頼る者らに時機相応に財を分け与え、三つの祭火を大事にし、清らなる煙を吸って、天界に赴き、神々の享樂を味わう。

nihan ulaha sañ vaiśya / mañajya sira ri sañ brāhmaṇa / ri sañ kṣatriya kunēñ / mwañ maweha dāna ri tēka niñ dānakāla / riñ śubhadiwasa / dumdumana nira ta sakweh niñ mamarāśraya ri sira / maglēma amūjā riñ sañ hyañ tryagni / sañ hyañ tryagni naran ira sañ hyañ apuy tiga / pratyeka nira / āhawanīya / gārhaspatya / citāgni / āhawanīya naran ira apuy niñ asuruhan / rumatēñi pinañan / gārhaspatya naran ira apuy niñ winarañ / apan agni sāksikā krama niñ winarañ i kāla niñ wiwāha / citāgni naran ira apuy niñ manunu śawa / nahan ta sañ hyañ tryagni naran ira / sira ta pūjān de sañ vaiśya / ulaḥ nira ika mañkana / ya tumēkākēñ sira riñ swarga dlāha //

ワイシャの行動はこうあるべきである。ブラーフマナ、あるいはクシャトリヤに学びなさい。布施すべき時機が来たら縁起の良い日に布施をしなさい。庇護を求めてきた者たちすべてに（財産を）分かち与えなさい。常に聖なる三火に供物を捧げなさい。三火というのは三つの祭火のことで、一つ一つ列挙すれば、アーハワニーヤ、ガールハスパティヤ、チタアグニである。アーハワニーヤとは食べ物を調理する役割の火である。ガールハスパティヤとは結婚の火である。というのはこの火は結婚式で執り行われる儀式の次第を目撃するからである。チタアグニとは、遺骸を焼く火である。これらが三火と呼ばれる⁷⁶⁾。ワイシャはこれを供養すべきである。このように行動すれば、将来、自らを天界へと至らせるだろう。

66.

brahmakṣatraṃ vaiśyavarṇaṃ ca śūdraḥ krameṇaitān nyāyataḥ pūjyamānaḥ /
tuṣṭeṣv eteṣv avyatho dagdhapāpas tyaktvā dehaṃ siddhim iṣṭāṃ labheta //77)

シュードラは、ブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャの各身分を、相応に、正しく仕えるべし。彼らが満足すれば、シュードラは煩いを離れ、罪過を焼き尽くし、身体を捨てたのち、望みを成就するだろう。

yapwan ulaha niñ śūdra / bhaktya sumewā ri sañ brāhmaṇa / ri sañ kṣatriya / riñ vaiśya /
yathākrama juga / parituṣṭa sañ tēlun sinewakanya / hilañ ta pāpanya ya / siddha sakāryanya //

シュードラはこのように行動すべきである。衷心からブラーフマナに、クシャトリア

に、ワイシャに、相応にお仕えしなさい。その奉仕に対しこれら三身分が満足すれば、その（シュードラ）の罪は消滅し、望みのすべてが成就する。

67.

rājā bhīrur brāhmaṇaḥ sarvabhakṣo vaiśyo 'nīhāvān hīnavarṇō 'lasās ca /
vidvān aśīlo vṛttahīnaḥ kulīnaḥ satyād bhraṣṭo brāhmaṇaḥ strī ca duṣṭā //⁷⁸⁾

怯懦な王、何でも喰うブラーフマナ、無気力なヴァイシャ、怠惰な下層身分、賢者ながら粗野な者、家柄良くとも悪行の者、誠実さなきブラーフマナ、そして女。彼らは悪人である。

hana pwa mañke kramanya / ratu wēdi-wēdi / brāhmaṇa sarvabhakṣa / waiśya nirutsāha riñ
krayawikrayādikarma / śūdra alēmēh sewaka riñ sañ triwarna / pañḍita duśśīla / sujanma anasar
riñ maryādānya / brāhmaṇa tan satya / strī duṣṭa duśśīlā //

つぎのように列挙される。臆病な王、雑食のブラーフマナ、売り買いなどの仕事に励まないワイシャ、(上位)三身分への奉仕を厭うシュードラ、無作法な賢者、高貴な生まれだが正しい行いから逸脱した者、誠実を欠いたブラーフマナ、女。これらは不屈きな悪人である。

68.

rāgī muktaḥ pacamānaḥ svahetor mūrkhō vaktā nṛpahīnaḥ ca rāṣṭram /
ete sarve śocyatām yānti rājan yaś cāmuktaḥ snehahīnaḥ prajāsu //⁷⁹⁾

出家行者ながら貪欲にして自ら食を作る者、頭の悪い朗詠者、王のいない国、子どもたちに愛情のない者。これらはすべて惨めな運命をたどる。

waneh / wānaprasthādi / sāvaka niñ matakī-takī kamokṣan / tātan hilañ rāganya / masuruhan
maphala ry awaknya / swārtha kewala wih / inēnahakēn⁸⁰⁾ pafīrthana / panēmwana wara-warrah /
ndān mūrkhā / tan panolih sukhāwasāna / kaḍatwan tan paratu / grhastha tan māsih riñ anak / tan
huniña riñ rāt kunēñ / samañkana lwir niñ kawēlas arēp / niyata wi panēmwanya hala //

さらにこう言われる。林棲期にあって、解脱の行を専らとしながらも情欲を捨てず、自身に結果があらわれることに励み、ただ自分のために、沐浴場や教場を設営する者、また、愚かにして幸福な結末を考慮しない者、王のいない宮殿、家住期にあって子供を愛さない者、また人民を大切に思わない者。このような者らは憐れむべきである。不幸な運命に至ること必定である。

69.

ārjavam cānṛśamsyaṃ ca damaś cendriyanigrahaḥ /
eṣa sādharmaṇo dharmāś caturvarṇye ‘bravīn manuḥ //⁸¹⁾

率直、配慮、自制、感覚器官の調御。これは四身分に共通の徳質である、とマヌは語った。

nyā n ulah pasādharmaṇan sañ caturvarṇa / ārjava / si duga-duga bēnēr / ānṛśānsya / tan nṛśānsya /
nṛśānsya naran iñ ātmasukhapara / tan harimbawā ri lara niñ len / yāwat mamuhara sukha ry
awaknya / yatika nṛśānsa nāranya / gati niñ tan mañkana / ānṛśānsya naran ika / dama /
tumañguhana⁸²⁾ awaknya / indriyanigraha / humrētēndriya⁸³⁾ / nahan tañ prawṛtti pāt /
pasādharmaṇan sañ caturvarṇa / liñ bhaṭāra manu //

さて四身分に共通する、あるべき振る舞いとは、まず率直、(すなわち)正しいことにまっすぐであること。配慮、(すなわち)人を傷つけないこと。人を傷つけるとは、自分の快樂のみにひたり、他人の痛みを思いやれないことである。自身には快樂をもたらすが、それは人を傷つけると言われる。そのようなことをしない振る舞いが、配慮と呼ばれるのである。自制、(すなわち)自身を抑制すること。感覚器官の調御、(すなわち)感覚器官を制御すること。これら四つの振る舞いが四身分に共通するものである。(このように)マヌ尊師は語ったのである。

70.

ahiṃsā satyavacanam sarvabhūteṣu cārjavam /
kṣamā caivāpramādaś ca yasyaite sa sukhī bhavet //⁸⁴⁾

不殺生、真実語、すべての人に対する公正さ、寛容、怠らないこと。これらを身につけた人は幸福になる。

si nihan tēmēn-tēmēn iñ yogya kawaśākēna / ahiṃsā / satya / si tan kira-kira kahalan niñ
sarwaprāṇī / si klana / si tan palē-palēh sañ makadrbya ika kabeh / sira prasiddha niñ sukha naran
ira //

次のことを真理にもとづいて然るべく自己管理すべきである。不殺生。真実語。すべての生類に害を加えないようにすること。寛容。散漫にならないこと。これらすべてを具えた人は、幸福を成就すると言われる。

注

- 1) 安藤 2018。
2) 本偈に最も近似するのは、既に Raghū Vira (1962) が示すとおり、*Indische Sprüche* (Böhtlingk 1966, 以下 IS) 94として収録されている次の偈である：

ajarāmaravat prājño vidyām arthaṃ ca cintayet /
gṛhīta iva keśeṣu mrtyunā dharmam ācaret //

これは *Hitopadeśa* 序第 3 偈と同一である。*Mahāsubhāṣitasamgraha* (以下 MSS) にも収録されている (378)。

- 3) 辞典 (Zoetmulder 1982, 以下 OJED) の引用例 (p. 1538, s.v. rēṅgut) に準じて、校訂版の rumaṅgut を修正。
4) OJED 引用例 (p. 998, s.v. layū) に準じて、校訂版の ahoṣanā palaywana を修正。
5) Michael Hahn によるチベットの金言集の翻訳研究 (2011, p. 323; 2012, p. 445) によれば、*Pañcadaṇḍa* 第216偈と *Gāthāsataka* 第104偈は同一で、これに対応するサンスクリット偈は、Vallabadeva の *Subhāṣitāvalī* 3267 および *Śuktiratnāhara* 37.14 に等しいというが、筆者未見である：

mastakasthāyanaṃ mrtyuṃ yadi paśyed ayaṃ janaḥ /
āhāro ‘pi na roceta kim utākāryakāritā //

本テキストと異なる roceta および akārya というこちらの読みのほうがサンスクリットとしては正当とみえる。

- 6) 後出の第37偈と比べれば、若者に dharma の遂行を訴える書き出しは共通するが、本偈では、刺激のある若い時に財も知識も、という青春期の重要性にフォーカスするのに対し、第37偈では、人生の無常を説いて dharma の実践を先延ばしにしないことが要点としている。
7) *Pañcatantra* 1.176 はほぼ同一である：

pūrve vayasī yaḥ śāntaḥ sa śānta itī me matiḥ /
dhātuṣu kṣīyamāṇeṣu śamaḥ kasya na jāyate //

IS 4180 はこれと同一である。本テキストとは下線の jāyate が異なるのみである。

- 8) サンスクリット偈では単に dhātu としているところを、古ジャワ語解説でまず「体内の dhātu」とし、さらに「wāta・pitta・śleṣma など」とパラフレーズしている点が注目される。
9) *Mahābhārata* (以下 Mbh) 12.309.41 はほぼ同一である：

purā śarīram antako bhinatti rogasāyakaīḥ /
prasaḥya jīvitakṣaye tapo mahat samācara //

下線部が本テキストと異なるが、Mbh 校訂版異読中に本テキストと同じ読みのものは見つからない。

- 10) 偈の śubham mahat を受けて śubhakarma としており、古ジャワ語解説者が参照した偈が元々 Mbh のように tapo mahat ではなかったことが明らかである。
11) IS 5515 は本偈とほぼ一致する：

yuvaiva dharmasīlaḥ syād anityaṃ khalu jīvitam /
ko hi jānāti kasyādyā mrtyukālo bhaviṣyati //

Mbh では 12.169.14ef-15ab と偈をまたぎ、しかも逆順に対応している：

ko hi jānāti kasyādyā mrtyusenā nivekṣyate (14ef)
yuvaiva dharmasīlaḥ syād animittam hi jīvitam (15ab)

- 12) Michael Hahn によるチベットの金言集 *Prajñādaṇḍa* の翻訳研究 (2010, p. 11) によれば、

その第127にもっとも近いサンスクリット偈とされるのが MSS 4809である (ただし Hahn は MSS 4908 と誤記) :

ā dhūmād vinivartante suhrdo bāndhavaiḥ saha /
yena tat saha gantavyaṃ tat karma sukrtaṃ kuru //

本テキストとは一部の語順や表現は異なるものかなり近似している。Hahn (2010, p. 11) によればこの MSS 所収の偈は *Cāṅkya Nīti Text Tradition* (Sternbach 1963–68) の第1231偈にあたるというが、筆者は未見である。

一方、本テキスト校訂者 Raghū Vira は MSS 5474を類例として提示している :

ā śmaśānān nīvartante jñātayaḥ saha bāndhavaiḥ /
tvayaikenaiva gantavyaṃ tat karma sukrtaṃ kuru //

前半後半ともに冒頭部分以外は完全に本テキストと一致している。

- 13) 校訂テキストは *loṣṭha* としているが、Monier-Williams の辞書 (1982, p. 908) が *loṣṭha* を “incorrect for *loṣṭa*” としていることに従って、綴りを修正しておく。

本偈は Mbh 13.112.13a–d とほぼ一致する :

mṛtaṃ śarīraṃ utsrjya kāṣṭhaloṣṭasamaṃ janāḥ /
muhūrtam upatiṣṭhanti tato yānti parānmukhāḥ /
(tais tac charīraṃ utsrjtaṃ dharma eko ’nugacchati //)

本テキストと同じ *uparudhyātha* という読みが南インド写本の一部に見られることが注目される。また、前半 ab だけなら、Mbh 13.112.3ab、Mbh 13.112.10ab は完全同一で、さらにマヌ法典 (以下 Manu) 4.241ab とほぼ一致する :

mṛtaṃ śarīraṃ utsrjya kāṣṭhaloṣṭasamaṃ kṣitau

- 14) *makānta* につづく動詞の前に *ñ* が現れる特異な用例については OJED (p. 83, s.v. *anta*) 参照。

- 15) OJED 引用例 (p. 2012, s.v. *timpal*) に準じて、校訂版の *warta* を修正。

- 16) OJED 引用例 (p. 2178, s.v. *balakañ*) に準じて、校訂版の *malakañ* を修正。

- 17) *sādhana* を「(解脱の手段としての) 宗教的行為」の意味にとり、文脈に合わせて訳しておく。

- 18) IS 1416 は本偈とほぼ一致する :

eko dharmāḥ paramā śreyāḥ kṣamaikā śāntir uttamā /
vidyaikā paramā tṛptir ahiṃsaikā sukhāvahā //

Mbh 5.33.48 もほぼ同じである :

eko dharmāḥ paramā śreyāḥ kṣamaikā śāntir uttamā /
vidyaikā paramā dṛṣṭir ahiṃsaikā sukhāvahā //

Mbh 校訂版異読の中に本テキストのように *ucyate* という読みは見つからないが、*tuṣṭi-* という読みが一部のデーヴァナーガリー版と多くの南方版にあることが注目される。

- 19) 文脈に即して、校訂版の読み *lēba* から、“width, wideness, kind disposition” の意味をもつ *lēbā* に修正。

- 20) OJED は *inak ambēk* という複合語を見出しに立て、“peace, enjoyment, satisfaction” の意味を提示している (p. 679, s.v. *inak*)。

- 21) Mbh 12.276.10 は本偈と言い回しは異なるが、意味するところは同一である :

śāstraṃ yadi bhaved ekaṃ vyaktaṃ śreyo bhavet tadā /
śāstraiś ca bahubhir bhūyaḥ śreyo guhyaṃ praveśitam //

- 22) 校訂版は *aṅgah* としているが、文脈および OJED 引用例 (p. 97, s.v. *aṅgā*) に従い、*aṅgā* と

- 修正 (“to be unwilling” の意味にとる)。
- 23) Cf. Mbh 12.130.19:
yaś caturguṇasaṃpannaṃ dharmam veda sa dharmavit /
aher iva hi dharmasya padaṃ duḥkham gaveṣitum //
前半は内容を異にするが、後半で *dharmā* の近寄り難さを蛇に例える意味合いは同じである。
- 24) *bapa* は一般的には「父親」のことだが、呼びかけでは小さな少年に対しても用いられる (OJED, p. 212) ことから、サンスクリット原文に準じて訳しておく。
- 25) OJED は *riñ kapwa* を見出しに立て (p. 800, s.v. *kapwa*)、*“in so far as equally”* という意味を示し、本例を引いている。
- 26) 本テキスト校訂者 *Raghu Vira* は言及していないが、*Manu* 2.10 が本偈とほぼ同じである：
śrutis tu vedo vijñeyo dharmasāstraṃ tu vai smṛtiḥ /
te sarvārtheṣv amīmāṃsyē tābhyāṃ dharmo hi nirbabhau //
- 27) 本テキストの読み *vinirbhṛta-* は校訂者自身疑問符をつけており、*Monier-Williams* ほかサンスクリット辞典にも登録されていない。とりあえず、例えば、*svasukhanirbhṛtaceta-* (心が自己の幸福感に満たされた (人)) といった用例を参照して仮に訳しておくが、マヌ法典中の偈の *hi nirbabhau* という読みの方が本来的であると考えられる。
- 28) *pramāṇakēna* は *pramāṇa* というサンスクリット本来の意味からすれば「正しい認識や判断の根拠とする」となるが、ここでは OJED が示す *“to use as a means of acquiring right knowledge”* に準じて訳しておく。
- 29) *riñ asin prayojana* はサンスクリット偈の *sarvārtheṣu* を古ジャワ語に直訳したと推定されるが、偈では *amīmāṃsya* (思量や議論の対象とすべきでない) にかかっているのに対し、古ジャワ語解説ではまったく異なる文脈に置き換えてこのフレーズを用いている点が注目に値する。
- 30) *Manu* 12.97 が本偈にほぼ一致する：
cāturvarṇyaṃ trayo lokāś catvāraś cāsramāḥ pṛthak /
bhūtaṃ bhavyaṃ bhaviṣyaṃ ca sarvaṃ vedāt prasidhyati //
tathā / trayo の相違については、*Manu* のように数に言及するほうが文脈的には自然なので、伝承過程で *trayo* から *tathā* に転訛したと解釈できる。ただし古ジャワ語解説で *tathā lokāś* をそのように直訳し、三界にも言及されていないことから、古ジャワ解説者が眼にした原文は *tathā* であったと推定される。
また、本校訂テキストでは、バリ文字テキスト、デーヴァナーガリー転記とも *prasidhyati* と表記しているが、*pra+√sidh* の三人称単数能動態の形としては *Manu* の *prasidhyati* が正しい。単なる子音重複表記か。
- 31) 校訂版は *sañka niñ* としているが、前者は *sañkan* (“place of origin, cause, reason”) と読むのが適切と考え、語の区切りを修正する。
- 32) 前注と同じく、テキストの *sañka niñ* を *sañkan iñ* と修正。
- 33) *Mbh* 1.1.204 は本偈とほぼ同一である：
itihāsapurāṇābhyāṃ vedaṃ samupabṛmḥayet /
bibhety alpaśrutād vedo mām ayaṃ pratariṣyati //
pracariṣyati という本偈と同じ読みは *Mbh* 校訂版異読のうちカシュミール版 1 つに見られる。
- 34) *Raghu Vira* はテキストの読みは *pracariṣyati* としているにもかかわらず、英訳では *prahariṣyati* と括弧付きで添えて *“strike”* と訳出している。ここでは *pra+√car* の原義 *“to proceed towards, go or come to”* に従って訳す。次の注も参照。

- 35) 「ヴェーダは聖典の知識の少ない者を恐れる」という表現以降、サンスクリット偈と古ジャワ語解説はずいぶん趣を異にしている。pra+√car か pra+√tī か pra+√hr かという偈の読みの違いというよりも、古ジャワ解説では「ヴェーダが恐れている」という箇所をさらに踏み込んでパラフレーズしたとみられる。
- 36) 校訂者は言及していないが、Mbh 13.129.5が本偈とほぼ一致する：
 vedoktaḥ paramo dharmāḥ smṛtiśāstragato 'paraḥ /
śiṣṭācīrṇaḥ paraḥ proktas trayo dharmāḥ sanātanāḥ //
 śiṣṭācāra (“practice or conduct of the learned”) と śiṣṭācīrṇa (“practiced by the learned”) はほとんど同義である。Mbh 校訂版の異読の中には本テキストの読みに一致するものはない。
- 37) 偈の *veda* を古ジャワ解説では *śruti* と表現していることに注目。
- 38) 偈の *śiṣṭācāra* を一旦そのまま引いてから、この複合語を原義に沿って正しく分析的に表現 (*ācāra nika sañ śiṣṭa*) している。
- 39) 校訂者は言及していないが、Mbh 13.114.8が本偈とほぼ一致する：
 na tat parasya saṃdadyāt praktikūlaṃ yad ātmanaḥ /
 eṣa saṃkṣepato dharmāḥ kāmād anyāḥ pravartate //
 Mbh 5.39.57および IS 3253はこの偈と一部表現は異なるが近似しており、Raghu Vira はこちらの方を注記に載せている：
 na tat parasya saṃdadyāt praktikūlaṃ yad ātmanaḥ /
saṃgrahenaīsa dharmāḥ syāt kāmād anyāḥ pravartate //
- 40) 校訂テキストは *dukha puhara hṛdroga* とするが、文脈および OJED 引用例 (p. 643, s.v. hṛdroga) に準じて *puhara* を *apuhara* (“to result in, end in, come to”) と修正する。
- 41) 刊本では *haywa tan harimbabā* の箇所に疑問符が付けられており、校訂・翻訳者にとっては意味が通らなかつたようだが、OJED (p. 595 s.v. harimbawā) の示す “considerate, compassionate, sympathetic, altruistic” に従えば、文意は明瞭である。
- 42) 最後から一つ前の一節はサンスクリット偈に沿うように「自らの恣意で行われるような法の実践は無益である」という解釈も可能であろう。しかし最後の一文で、*līlā* という語を用いているところからして、「結論的に自分に快いことをすべきだ」と踏み込んだ解釈で解説に臨んでいるとみたほうが自然である。
- 43) Mbh 3.198. 64が本偈とほぼ一致する：
 ye tu śiṣṭāḥ suniyatāḥ śrutiyāgaparāyaṇāḥ /
 dharmyaṃ panthānam ārūḍhāḥ satyadharmaparāyaṇāḥ //
 Mbh 12.309.11もほぼ同一である：
 ye tu tuṣṭāḥ suniyatāḥ satyāgamaparāyaṇāḥ /
 dharmyaṃ panthānam ārūḍhās tān upāssva ca pṛccha ca //
- 後者の校訂版異読中に本テキストと同じく *satyārjava-* という読みは複数の写本にあるようだが、*ārūḍha-* に続く一節については本テキストも上例 2 つも大きく異なり、異読中に近似するものも見つからない。
- 44) 校訂版では *niyata pasaṇḍan* としているが、文意および OJED 引用例 (p. 1647, s.v. saṇḍa) に従って、後の語を *apasāṇḍan* という読みに修正する。
- 45) *sarwadāya* (“the whole, the summation”) に関して OJED (p. 169) はこの文例は引いてはいないものの、本テキストからは第 72 偈解説ほか、多くの用例を取録している。
- 46) 前半の属格も、後半にある *niścaya* (主格) にかかっているのだが、文脈に合わせて訳出しておく。

47) rūpa は古ジャワ語では一般的に「外見、色、形、あるいはその美しさ」といった意味だが、ここでは文脈に沿って「~のように」という比喩的な意味合いにとっておく。

48) 校訂者は指摘していないが、*Padma Purāṇa* の Śreṣṭhi Kāṇḍa 19.335-336 に対応する偈が見つかる：

śrūyatām dharmasarvasvaṃ śrutvā caitat pradhāryatām / (335cd)

ātmanaḥ pratikūlāni pareṣāṃ na samācāret // (336ab)

Viṣṇudharmottara Purāṇa 3.253.44 もほぼ同一である：

śrūyatām dharmasarvasvaṃ śrutvā caivāvadhāryatām /

ātmanaḥ pratikūlāni pareṣāṃ na samācāret //

後者と同一の偈は、*Pañcatantra* 3.104, IS 6579 としても含まれている。

49) cupwananta は、cupu (“a small pot or box”) の派生語で、OJED は “to store carefully” という意味を示している。原語からすれば、大事なものを小箱に大事に入れておくというニュアンスである。なお、OJED の引用例 (p. 339, s.v.cupu) では cupwananta に先行する語を rēṅṅta としているが、それを採用せず、校訂テキストの読みどおりにしておく。

50) 第47偈解説での言及を指している。

51) 校訂テキストは pulākā としているが、他の文例や文脈からすれば、pūlākā と読むのが自然であり、そのように修正する。

52) Mbh 12.174.7 は本偈とほとんど一致する：

pulākā iva dhānyeṣu puttikā iva pakṣiṣu /

tadvidhās te manuṣyeṣu yeṣāṃ dharmo na kāraṇam //

これと同一の偈が IS に 4158 として収録されている。*Pañcatantra* 3.99 もほぼ一致するが、第2句で puttikā でなく pūtikā とし、第3句では「人間における蚊のごとし」という他にない比喩表現を用いている：

pulākā iva dhānyeṣu pūtikā iva pakṣiṣu /

maśakā iva martyeṣu yeṣāṃ dharmo na kāraṇam //

53) wūkan の訳は OJED (p. 2321, s.v. wūk (I)) の “rotten eggs” に従う。Raghu Vira は、古ジャワ解説者が偈の puttikā を pūtikā と誤解していると指摘する (p. 44) が、Monier-Williams の辞典によれば puttikā の誤記例としての pūtikā もある (1980, p. 641)。また pūtikā と読む *Pañcatantra* のような例もある (前注)。したがって、解説者が参照したサンスクリット偈じたいが pūtikā とあったゆえに「腐敗した、腐敗臭のする」の意味で古ジャワ訳をほどこしたと推定することも可能だろう。

54) 校訂テキストの tahā pih を修正。taha が強調辞 pih を伴い “On the contrary; no!; even...” を意味する (OJED, p. 1897, s.v. taha) と解釈する。

55) Mbh 3.198.63 は本偈とほとんど一致する：

ye tu dharmam asūyante buddhimohānvitā narāḥ /

apathā gacchatām teṣāṃ anuyātāpi pīḍyate //

ただし、Mbh 校訂版異読中に janāḥ という読みは見つからない。本テキスト第48偈が Mbh のすぐ次の偈と相応する点も興味深い (注43)。

Mbh 12.309.10 も近似する：

dharmāya ye 'bhyasūyantī buddhimohānvitā narāḥ /

apathā gacchatām teṣāṃ anuyātāpi pīḍyate //

56) 校訂テキストのデーヴァナーガリー転記では puṅganya、パリ文字版では puṅunya となっているが、これでは意味がとれず、OJED を参照し puṅguṅya (p. 1445, s.v. puṅguṅ (“ignorance”))

と読みを修正した。

- 57) Mbh 3.245.18 は本偈とほぼ一致する：

adharmarucayo mūdhās tiryagatiparāyaṅḥ /
krcchrām yonim anuprāpya na sukham vindate janāḥ //

これと完全に一致するものが MSS1076 として取められている。なお校訂版異読中に本偈により近い読みは見つからない。

- 58) Mbh 12.309.45 は本偈とほぼ完全に一致する：

dhanasya yasya rājato bhayaṃ na cāsti caurataḥ /
mṛtaṃ ca yan na muñcati samarjayasva tad dhanam //

Raghu Vira は報告していないが、ほぼ同一の偈が *Garuḍa Purāna* にもある (1.109.21)：

dhanasya yasya rājato bhayaṃ na cāsti caurataḥ /
mṛtaṃ ca yan na mucyate samarjayasva tad dhanam //

- 59) Mbh には類例が見つからないが、*Satsaṅgijīvanam* という文献に対応偈が含まれている。これは19世紀初頭イギリス植民地下のインド・グジャラートで一種のヒンドゥー教復興運動を起こした Swami Sahajananda (1781-1830) の直弟子 Śātānanda が、師の教えをサンスクリット偈でまとめ、日常生活や信仰上の規範を法典の形で示したものである。Cf. *Satsaṅgijīvanam* 2.1.34:

nāvasīdati ced dharmah kapālenāpi jīvatā /
āḍhyo `smīty eva mantavyaṃ dharmavittā hi sādhaveḥ //

第1句の語順が異なるくらいで本偈とほぼ一致する。他の古典サンスクリット文献とのパラレルが見つからない中で、この近世のサンスクリット偈じたいの典拠が何であるのか興味深い。

- 60) na nāma kim (nanāma kim?) の箇所は、校訂者も疑問符をつけており、文法的にも意味的にもはっきり説明がつかない。

- 61) サンスクリット偈では *śiloṅca*・*ambu*・*sāka* (落ち穂の穀物・水・野菜) の三つを並列しているが、古ジャワ解説では、明らかに *śiloṅca* に相当する語を動詞 (aN+asag “to glean”) で表現しているところが注目される。古ジャワ解説者が偈の真意をとらえ、巧みに言葉を補っていることがうかがえる。

- 62) *Tantrākhyāyika* 2.84 はほぼ完全に本偈と一致する：

santi śākāny aranyeṣu nadyaś ca vimalodakāḥ /
candras sāmānyadīpo `yaṃ vibhavaīḥ kiṃ prayojanam //

これはチベットの金言集 *Prajñādaṇḍa* 第115偈に相応する (Hahn 2010, p. 5)。

- 63) 校訂テキストの *harohara hosanna nwaṅ* という読みでは意味が取れないので、OJED 引用例 (p. 1369, s.v. hos) に準じて読みを修正。

- 64) 校訂テキストの *lumbu* では意味が取れないので、サンスクリット偈から推定して読みを修正。

- 65) *Harivaṃśa* 66.13 が本偈とほぼ一致する：

budhena tāta dāntena nityam abhyucchritātmanā /
dharmasya gatir anveṣyā matsyasya gatir apsv iva //

- 66) 校訂テキストでは *upaśamā pagwan* と区切るが、文意からして後者は *apagwan* とすべきであり、読みを修正する (OJED, p. 1231, s.v. pagu)。

- 67) 本偈前半は *Manu* 10.4 の前半と完全に一致する：

brāhmaṇaḥ kṣatriyo vaiśyas trayo varṇā dvijātayaḥ /

- Mbh 12.285.25前半、13.10.63前半、13.47.7後半もこれとほとんど同一である。ただし、いずれも半偈が一致するのみで、本偈の *caturtha* 以下に近似するものは見つかっていない。
- 68) OJED (p. 449, s.v. *dwijāti*) が再生族の説明について本解説を長々と引用していることからすれば、古ジャワ語法典類や金言集で *dwijāti* についてこれほど詳しく定義的記述するものはないのかもしれない。
- 69) Mbh 5.29.21が本偈とほぼ一致する：
adhīyāta brāhmaṇo tha yajeta dadyād iyāt firthamukhyāni caiva /
adhyāpayed yājayec cāpi yājyān pratigrahān vā viditān praticchet //
- 70) 校訂者は *wikwa niñ ayajña* と区切り、注で *wikwa* は *wiku+a* と注記するが、*wiku* が動詞として用いられるとしても、あとの *ayajña* との意味の連関が解釈しがたい。ここでは区切りを変えた別の読みの可能性を仮に示しておく。
- 71) Mbh 5.43.12が本偈とほぼ同一である：
dharmaś ca satyaṃ ca damas tapaś ca amātsaryaṃ hrīś titikṣānasūyā /
yajñāś ca dānaṃ ca dhṛtiḥ śrutaṃ ca mahāvratā dvādaśa brāhmaṇasya //
- Śrīmad Bhāgavatam 7.9.10は、*mahāvratā* を *vratāni vai* と読む以外は上偈と同一。他方、Mbh 6.40.42 (=Bhagavadgītā 18.4) はブラーフマナの特質について異なる説明をしている：
śamo damas tapaḥ śaucaṃ kṣāntir ārjavam eva ca /
jñānaṃ vijñānaṃ āstikiyaṃ brahmacarma svabhāvajam //
- 72) 校訂版は *piharan* としているが、これで意味がとれないので、語形と文脈から読みを修正。OJEDの引用例 (p. 930, s.v. *kurañ*) もこの読みを採用している。*kuraṇana* とともに *viṣaya* と連関させて訳しておく。
- 73) 校訂版は *manēb* とし、*tōb* からの派生と注記しているが、ここでは文脈から *manēb* (*ma+nēb*) と読みを修正する。
- 74) Mbh 5.40.24の前半は本偈と完全に一致するが、後半は全く異なっている：
adhītya vedān paraśamstīrya cāgnīn iṣtvā yajñaiḥ pālayitvā prajāś ca /
gobrāhmaṇārthe śāstrapūtāntarātmā hataḥ samgrāme kṣatriyaḥ svargam eti //
- 前半は同一だが、後半は言い回しも内容も大きく異なっている。なお MSS 1125も Mbh と同じく、前半のみが完全に一致する。
- 75) Cf. Mbh 5.40.25:
vaiśyo 'dhītya brāhmaṇān kṣatriyāṃś ca dhanaiḥ kāle samvibhajyāśritāṃś ca /
tretāpūtaṃ dhūmam āghrāya puṇyaṃ pretya svarge devasukhāni bhunkte //
- 前半で、Mbh では *brāhmaṇa* と *kṣatriya* いずれも複数対格だが、本テキストでは単数奪格になっている。また後半で、Mbh の *-pūta* が本テキストでは *-pūrva* となっている。Mbh 中の偈が連続して本テキストに現れる（ただし前偈は前半のみ一致だが）ことも興味深い。
- 76) *tryagni* という用語は、サンスクリット語としては、Burnoufの辞典 (1866, p. 306) は見出し語に挙げて “m. le triple Agni, les trois feux sacrés” と記しているが、Monier-Williams には登録されていない。*agnitraya*、*agnitretā* あるいは単に *tretā* という表現がサンスクリットでは一般的で、シュラウタ祭に不可欠の三つの祭火として、*āhavanīya*、*gārhapatya* 及び *dakṣiṇāgni* が挙げられる。例えば Mbh 12.109.7でも *agnitretā* という用語、および三火の名前に言及している：
pitā hy agnir gārhapatyo mātāgnir dakṣiṇaḥ smṛtaḥ /
gurur āhavanīyas tu sāgnitretā garīyasī //
- また Manu 2.231も同様である：

pitā vai gārhapatyō 'gnir mātāgnir daksināḥ smṛtāḥ /
gurur āhavanīyas tu sāgnitretā garīyasī //

シュラウタ祭では祭場西方の *gārhapatya* (家長の火) から、東方の *āhavanīya* (捧げ物として供せられる火) と南方の *dakṣina* (南の祭壇の火) へと展開されるという。このように本来、インド世界でこの三聖火は、祭場と方角・役割に関連して命名もされていたことがわかる。

一方、古ジャワ文献では最古の文学作品 *Rāmāyaṇa* にも *tryagni* という語が用いられる (24.2) が、具体的に三祭火を列挙しその説明を加えているものは、本テキストのこの箇所のほかにもう一つ、バリ由来のサンスクリット語・古ジャワ語の宗教文献 *Jñānasiddhānta* がある。その第25章第9-10偈で *gārhaspati*・*āhaniya*・*dakṣina* の三火をそれぞれシヴァ神の顔・心臓・胃に配し (ただし各偈での配当が異なっている)、そのまとめ (*saṃkṣipta*) としての古ジャワ語散文で “*tryagni*” という用語を用いているのが見て取れる (Soebadio 1971, pp. 240-242)。

Jñānasiddhānta も本テキストも、*gārhapati* でなく *gārhaspati* と称していること、そして三火の本来の性質とは異なっていることが注目される。特に本テキストでは、*dakṣina* でなく *citāgani* (サンスクリットでは火葬用に組み上げられた薪の火) を三火に挙げている。本テキストの古ジャワ解説者が、参照できたはずの *Mbh* 及び *Manu* にも明記されている定義から逸脱して、三火を人生の展開に配置し、しかも *citāgni* を組み入れて独特な解釈を加えていることの理由や背景は謎であり、今後の調査課題としたい。

77) *Mbh* 5.40.26が本偈とほぼ一致する：

brahmakṣatram vaiśyavarṇaṃ ca śūdraḥ krameṇaitān nyāyataḥ pūjyānaḥ /
tuṣeṣv eteśv avyatho dagdhapāpas tyaktvā dehaṃ svargasukhāni bhūṅkte //

前半終わりで本偈と同じく *pūjyamānaḥ* と読む写本がデーヴァナーガリーとグラントの写本にいくつかある。また後半終わりでも、本偈に近い *siddhim iṣṭāṃ vrajetha* という読みがテルグ、グラントの写本いくつかに見られる。

78) *Mbh* 12.279.24は本偈とほぼ一致する：

bhīrū rājanyo brāhmaṇaḥ sarvabhakṣo vaiśyo 'nīhāvān hīnavarṇo 'lasaś ca /
vidvāṃś caśīlo vṛttahīnaḥ kulīnaḥ satyād bhraṣṭo brāhmaṇaḥ strī ca duṣṭā //

本偈より近い読みは校訂版異読には見つからない。

79) 前偈との一致が見られた *Mbh* の直後の偈 12.279.25がほぼ一致する：

rāgī muktaḥ pacamāno 'tmahetor mūrkhō vaktā nṛpahīnaṃ ca rāṣṭram /
ete sarve śocyatām yānti rājan yaś cāyuktaḥ snehahīnaḥ prajāsu //

80) 校訂版は疑問符つきで *inahakēn* としているがこのままでは意味をなさない。OJED の引用例 (p. 1986, s.v. *panēmwan > tēmu*) に準じ、*inēnahakēn* (> *ēnah*, “to place, give its pace, put in position”) と読みを修正する。

81) MSS 5248は本偈と完全に一致する。他方、「マヌは語る」というものの、*Manu* 10.63が規定する四身分に共通の特質は次のとおりである：

ahiṃsā satyam asteyaṃ śaucam indriyanigrahaḥ /
etaṃ sāmāsikaṃ dharmam cāturvarṇye'bravīn manuḥ //

ここでは不殺生・誠実・不偷盗・清廉・感官の調御の四つを挙げており、最後の一つ以外は本テキストと異なっている。

法典や叙事詩でこうした徳目に言及している事例を調べると、列挙される項目はまちまちである。まず、*Arthaśāstra* 1.3.13-14には本テキストと同じ *ānṛśamsya* が含まれるものの、他は *Manu* に近い：

sarveṣām ahimsā satyaṃ śaucam anasūya ānṛṣaṃsyaṃ kṣamā ca
svadharmāḥ svargāyānantiyāya ca

Mbh 13.23.19ab には本テキストと Manu の両方の徳目が混じっている：

ahimsā satyaṃ akrodha ānṛṣaṃsyaṃ damas tathā

Mbh 12.89.28cd も同様である：

satyaṃ ārjavam akrodham ānṛṣaṃsyaṃ ca pālaya //

本テキストがどのようなサンスクリットの伝承をうけたのかが不明である。

82) 校訂テキストの読み tumaṅghana では意味が通らず、読みを修正 (OJED p. 1939, s.v. taṅguh)。

83) OJED 引用例 (p. 644, s.v. hrēt) では humrēt an indriya としているが、校訂テキストにも異読にも ṅ は現れず、このままでも解釈に支障はないので、そのような読みの修正は採用しないでおく。

84) Mbh 12.208.6 は本偈と完全に同一である。

参照文献

Böhtlingk, Otto

1966 *Indische Sprüche*, 3 vols., Osnabrück (reprint).

Bühler, G. (ed.)

1885 *Panchatantra* IV and V, Bombay Sanskrit Series No. I, Bombay.

1886 *Panchatantra* II and III, Bombay Sanskrit Series No. III, Bombay.

Burnouf, Émile

1866 *Dictionnaire Classique Sanscrit-Français*, Paris.

Gonda, J.

1998 *Sanskrit in Indonesia*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 99, New Delhi (reprint).

Hahn, Michael

2010 The Tibetan Shes rab sdong bu and its Indian Sources (II), 『南アジア古典学』(九州大学文学部インド哲学史研究室) 第5号, pp. 1–50.

2011 The Tibetan Shes rab sdong bu and its Indian Sources (III), 『南アジア古典学』第6号, pp. 305–353.

2012 Vararuci's *Gāthāśataka* (*Tshigs su bcad pa brgya pa*) and its Indian Sources, 『南アジア古典学』第7号, pp. 367–458.

Kale, M. R.

1986 *The Pañcatantara of Viṣṇūśarman*, Delhi (reprint).

2015 *The Hitopadeśa of Nārāyaṇa*, Delhi (reprint).

Kangle, R. P. (ed.)

1988 *The Kauṭīliya Arthaśāstra*, 3 parts, Delhi (reprint).

Kern, Hendrik

1900 *Ramayana Kakawin: Oudjavaansch heldendicht*, 's-Gravenhage.

Kielhorn, F. (ed.)

1885 *Panchatantra* I, Bombay Sanskrit Series No. IV, Bombay.

- Mandik, V. N. (ed.)
1992 *Mānava-Dharma Śāstra*, 3 vols., New Delhi (reprint).
- Monier-Williams, M.
1982 *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford (reprint).
- Peterson, Peter (ed.)
1986 *Hitopadeśa by Nārāyaṇa*, Delhi (reprint).
- Raghu Vira
1962 *Sāra-samuccaya, a Classical Indonesian compendium of high ideals*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 24, New Delhi.
- Sharma, R. N. and N. S. Singh (eds.)
1984 *The Garuḍamahāpurāṇam*, Delhi.
1987 *The Bhāgavatamahāpurāṇam*, 4 vols., Delhi.
- Shastri, Carudeva, and N. S. Singh (eds.)
1984–85 *The Padmahāpurāṇam*, 4 vols., Delhi.
1988 *The Viṣṇudharmottarapurāṇam*, Delhi.
- Soebadio, Haryati
1971 *Jñānasiddhānta*, Bibliotheca Indica 7, The Hague.
- Sternbach, Ludwik
1963–70 *Cāṅkhyā-nīti-text-tradition*, 2 vols. (5 parts), Hoshiarpur.
1974–2007 *Mahā-subhāṣita-saṃgraha: being an extensive collection of wise sayings in Sanskrit*, vols. 1–8, Hosiapur.
- Sukhtankar, V. S. and S. K. Belvalkar (eds.)
1933–66 *The Mahābhārata, for the first time critically edited*, 19 vols., Poona.
- Vaidya, P. L. (ed.)
1969–71 *The Harivaṃśa: being the khila or supplement to the Mahābhārata, for the first time critically edited*, 2 vols., Poona.
- Zoetmulder, P. J.
1982 *Old Javanese-English Dictionary*, 2 vols., 's-Gravenhage.
- 安藤 充
2018 古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(1) 『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第33号, pp. 117–137.
- 上村勝彦 (訳)
1984 『カウティリヤ実利論—古代インドの帝王学』(上)(下), 岩波文庫.
- 田中於菟弥・上村勝彦 (訳)
1980 『パンチャタントラ』大日本絵画.
- 渡瀬信之 (訳注)
2013 『マヌ法典』平凡社.

【電子情報】

Mahāsubhāṣitasamgraha, verses 1-9979

https://people.math.osu.edu/rao.3/utf/msubhs_u.htm

Satsaṅgijīvanam

<https://www.aoi.uzh.ch/dam/jcr:57ece309-5784-4840-8015.../ssj-skt-tf.rtf>

